自分らしく生きる　人として生きる

ここしばらく、「自分らしく生きる」という言い方が、良く使われています。なるほど、いい言葉だなあと思う反面、なにか割り切れない、納得できないところがあるのも事実です。

自分らしく生きると言って、わがまま勝手に、人としての生き方に反することをしている人も、たくさん見かけるからです。

Ⅰ．　人間として生きる　自分らしく生きることよりも、人間として生きることが、もっと基本的で、大切なこととして守られなければなりません。わがままで、自分中心で、人の迷惑も顧みない人たちが、「自分らしく」と叫んでいるのに、耳を傾ける必要はありません。

目に見えず、気高く、厳かで、恵み深く、清らかなお方を感じない人たち、あるいは感じても気に留めない人たちは、自分らしく生きることにこだわります。クリスチャンは、日本人の多くが感じている目に見えず、気高く、恵みに富むお方が、実は聖書が教えている天地の創造者であることを、知っています。そしてこのお方が、人間をお造りになったことも、よく理解しています。人間を造ってくださったお方のみ心に従って、あるいは造られた目的に従って生きることが、人間としての生き方であると、納得しています。そして、造られた目的に従って、人間らしく生きるときに、人間は最も幸せになれるのだということも、よくわかっています。

人間が造られた目的は一つです。それは神の栄光を現すことです。神の栄光を現すことは、二つの分野に分けられます。一つは神との関係です。それはふつう神を愛するという言葉で表現されていますが、日本語としてはむしろ、神を敬愛する、慕う、信頼するというような言葉で表すべきかと思われます。造り主であるお方を認めて、感謝と喜びをもって、敬い、称え、感謝し、信頼するのです。

次は、造られた人間同士が愛し合うことです。互いに相手の幸せを願い、相手の幸せを喜び、相手の幸せのために生きることです。平和を望んで作り出し、難儀をしている人に手を差し伸べることです。これこそが、人間を愛しておられる創造者が、人間にお望みになることです。人間をご自分に似せてお造りになった方は、人間と心の交わりを持つことと、人間が愛し合いながら生きる姿をお喜びになるのです。

日本人はこの創造者についてこそよく知りませんが、心に残っていた神に似せて作られた姿、すなわち人間の本能によって、このお方のことを感じて、大切にしているのです。日本人が世界の民族の中でも特異なのは、その本能の強さです。だから、平均的日本人は「神なんていない」と言いながら、自分の心にある信仰心を大切にし、また人を尊んで平和に生きようとするのです。人の迷惑にならないように心掛け、人の益になるように願いながら生きているのです。

Ⅱ．　自分らしく生きる　このような、日本人らしい生き方をしようとする人、人間として人間らしく生きようとする人に、自分らしく生きるという言い方はなじみません。自分らしく生きることの多くが、

人を人とも思わない、勝手で、人を傷つけてもなんとも思わない生き方に通じるからです。

　とはいえ、自分らしく生きることはまた、非常に大切です。神に造られた人間としての生き方をきちっと守ったうえで、自分らしく生きるのです。すべての人間は一人ひとりユニークで、同じ人は二人といません。それぞれが異なっていて、様々な特徴を備えています。人間をお造りになった方は、人間が大きな社会の中で機械の部品のように同じにではなく、それぞれの特徴に応じて、その特徴を生かして生きる、異なったものとしてお造りになったのです。

　ただその場合、あくまでも、造り主の目的に沿って、造り主を敬愛し、人を愛するという生き方の中で、それぞれの特徴を最大限に生かすのです。どれほど自分の特徴を生かしても、創造者であるお方の栄光を汚すような生き方であってはならないのです。人の幸せを損なう生き方ではだめなのです。

　最近は、カミングアウトなどという言い方で、男が女のようにふるまったり、女が男のように生活したりすることが、社会に受け入れられるようになってきました。同性同士の結婚が認められる国も増えてきました。性に関する障害があってそのようになる場合は、その人の人格を認めて、幸せに生きられるようにしてあげるのは当然です。しかし、単なる嗜好の問題として、男女の違いを簡単に消してしまおうとか、変えてみようとするのは、人間に対する造り主の基本的なご計画に反することです。泥棒をしないではおれない障害を抱えた人でも、差別されずに生きていける社会を作ることは大切です。しかし泥棒を容認する社会を造ってはなりません。ましてや障害でもないのに、泥棒の自己弁護をすることは許されません。

　私たちクリスチャンは、造り主に似せて作られたという原則を大切にして、人間の道を踏み外さず、そして自分の特徴を生かして生きていきましょう。